

## 「氣」概論

——古代中国の文献を通して——

平井 良昌

(現代宗教研究所研究員)

はじめに

近代科学技術の発展は我々人間に多大な物質的恩恵をもたらし、さらに、宇宙の成立や構造などもかなりのところまで解明されてきている。しかし、その様な中にも「人間は宇宙の中でどのような位置を占め、どの様な役割を果たし、何を目指すべきなのか」という本質的なところは不問にされてきたので、魂の在り方を失った人間は不安になり、様々な社会問題を起こしているのが現状である。ここに宗教が現代に即した解釈を求められる理由がある。

一方で、来る二十一世紀は、「氣」の時代といわれているが、「氣」とは一体どういうものなのであろうか。普段、日常の中でも我々が何気なく使っている「氣」とは、どういうイメージのものなのか。

そこで、「氣」をキーワードに宗教（仏教）を自分なりにとらえ直そうと思い始めたのが本研究である。そのためにも全体像を一度しつかりとらえる必要があると考え、「氣」の概念を手始めの研究テーマにした。もとより非常に多岐にわる「氣」の世界を、少々の研究で分かるはずもないが、古代中国文献における「氣」の思想を通して「氣」の概念を知る一助としたい。

# 一、「氣」の原初的イメージ

まず初めに、「氣」の元々のイメージとはどの様なものであったのか、氣の文字の原義から考察したいと思う。

## (1) 最も古い字書の解釈

『說文』（說文解字）（許慎著 紀元前一〇〇年頃成立）漢字九千余字を五四〇の部首により分類し、六書の説により字形の成立を説明しているによると「氣」の字義は、「客におくる芻米（食糧・ご馳走の意味）」のこととされているので、氣のイメージとはだいぶ異なっている。一方、「氣」については、「雲氣也、象形……」と解説している（氣は雲をかたどったとするのか、雲に限らず一般にかすんだ物の形状を写したものとするのかのいずれかであるにせよ、許慎は、自然に空に浮かぶ軽やかなものの象形と考えた。つまり、大地からユラユラと水蒸気が立上がり、雲となつて天空にたなびく姿の象形である）。しかし、氣は本当に雲或いはかすんだものの象形であったのだろうか。氣が雲のようなもやもやしたものの象形とされた理由を考えみると、

- a、氣の形が雲のような物を連想させる。
- b、その文字が、何の象形か分からなくなつたときは、「その文字は何かの物を象つた」と考えるのが妥当であり、そして、その象つたものには、はつきりとした具体的存在が求められる。この場合、それが視角に映る雲もしくは空気のようなものであると考えられた。
- c、氣がもつ空気のようなものとしての意義と雲の性質は結合されやすい。
- などが推察される。もしこれらの理由が正しいのなら、「氣」一字を使った場合でも、雲の意義を示す文献があつてもよさそうなのだがその例がない。そして、「雲」には別に独立した象形文字が存在しており、また、かすんだものの象形とすると、氣のもつ多くの觀念を説明できないので、これが唯一の解釈だとは考えられない。

## (2) 呼吸と風

では、「氣」の象形は何かということを他のもので考えてみたいと思う。」に仮に「呼吸を象ったもの」と考えてみたい。文字の上からでは雲以上に連想できないが、他国の言葉で、精神とか靈魂とか生の原理とかの意味を含む言葉を調べてみると、(例えば、梵語の<sup>1</sup>atman・prana ラテン語のspiritu(s) ギリシャ語のpneumaなど) いずれの言葉も呼吸を元の意味にしており、氣という言葉にも呼吸作用・空気のようなもの・生の原理・心理的作用の觀念があるので、従つて氣という言葉には、明確なイメージとして「呼吸」があり、そのイメージとしての「呼吸」を象った文字が「氣」であったと推察できる。

「呼吸」とは、全ての生物の生命維持の基本であり、鼻を通して、見えない「或るもの」が出入りすることによって生が保たれる。つまり、呼吸とはまさに生命現象の象徴にほかならない。この出入りする生命エネルギーとしての「或るもの」を氣という言葉で呼んだのである。そして、更に古代中国では、生物のみならず天地も呼吸していると考えられていた。それはすなわち「風」である。風は、それ自体見えないが、雲を動かし雨を呼び、自然界の運行の原動力となつて生物を生育する天のエネルギーである。この生命現象と自然界の生滅変化の象徴としての呼吸と風が、「氣」の原初的イメージとして最も強く感じられていたと推察される。

### 一、中国文献における「氣」

文献における「氣の諸相」を大別すれば「人間に關する氣」と「自然における氣」に分けることができる。更に細かく分類すると「人間に關する氣」は、「人間の心理的作用や希に靈的な存在」と「呼吸作用に代表される人体の生理作用」に分けられる。一方、「自然における氣」は、「軽やかなふんわりとした存在」「生物一般を通しての生命の原理」「宇宙生成論的意味においての物の本源」の三つに分けられるが、しかしこの様な分類は大して意味がない。

何故なら「氣」とは分断された非連続体ではなく、全てが関連している連続性のある存在だからである。ともあれ気の諸相を、中国の代表的な文献に見ていきたい。

### ①『論語』

最初に『論語』では、「氣」は、既に生活に密着した言葉として使われており、人間にかかる氣として表現されていった。

辯氣……言葉を口にすること

屏氣……息遣い

食氣……人の食欲

血氣……人間の生理機能一般。後にこの言葉は、体内を循環する生命エネルギーという意味として広く使われるようになる

### ②『孟子』

次に、『孟子』では公孫丑篇の「浩然之氣」という有名な言葉がある。

夫志氣之師也、氣體之充也、夫志至焉、氣次焉、故曰、持其志、無暴其氣（中略）曰、我知言、我善養吾浩然之氣、敢問、何謂浩然之氣、曰、難言也、其爲氣也、至大至剛、以直養而無害、則塞天地之間……

（それ志は氣を師いるものにして、氣は充つるものなり。それ志至れば氣は之に次ぐ。故に「その志をまもりて、その氣を暴うことなかれ」というなり。（中略）曰く、「私は言葉を知れり。我はよく我が浩然の氣を養えり」と。しいて問う。「何をか浩然の氣というや」曰く。「言り難し。その氣たるや、至めて大。至めて剛にして直く。養いて害うことなれば、天地の間にも塞み」  
「志は氣を率いるものであり、氣は体に充満しているものであるから、志が動けば氣が動き、つられて体も動くよ

うになる。そして、氣の最高の在り方として『浩然の氣』を唱えている。『浩然の氣』とは、極めて大きくて強く、正しく素直なものである。これを養い損なうことがなければ、この氣は、天地の間に満ち満ちてゐるので、宇宙自然と合体した境地になる」と説いてゐるのである。

このように『孟子』では『論語』における氣とは違ひ、精神的なものと肉体的なものの結合として天地自然に満ち溢れている氣を説いており、氣が思想的にも重要な意味を帶びてきているのである。何故ならば、「氣」の概念が、論語のように生活に密着した氣、つまり單なる局部的・部分的な物質を意味する氣から、天地自然に満ち溢れている氣、つまり抽象的なエネルギーを意味するようになつたからである。

### ③『老子』

次に『老子』では、「氣」に関する有名な言葉をあげておこう。

道生一、一生二、二生三、三生万物。万物負陰而抱陽。冲氣以為和。……（四十二章）

（道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。万物は陰を負うて陽を抱き、しゆうきはもつて和を為す）

これは、短い文章であるが、万物生成論における原理的な性格をおび、後世に大きな影響を与えた。例えば、『淮南子』で展開された「氣一元論的世界觀」や、それを土台に形而上学的發展から「理氣二元論」（朱子学）への展開へとつながつていつたのである。

### ※「氣一元論的世界觀」と「理氣二元論」

形而上（時間・空間の感性形式をとる経験的現象として存在することなく、それ自身超自然的であつて、たゞ理性的思惟に、または独特な直感によつてとらえられるとされる究極的なもの）形而下（自然一般・感性的現象、すなわち時間・空間のうちに形をとつて現れるもの）という観点から氣を見ると、つまり氣とは見えない

「或るもの」ではあるが、形而上の「道」とは存在の次元を異にする形而下の存在であった。しかし、時代がたつにつれ、形而上の「道」と形而下の「氣」が同一視されるようになり、氣（一氣）を万物の始源とする気の原理として理（それ自体形質もなく動靜もしない）の存在を主張する「理氣二元論」が生まれてきた。この場合、理と氣は、常に相即関係にあるもので、存在的に理が氣に優先することはない。この点はデカルト的二元論とは異なる。

#### ④『莊子』

次に『莊子』での「氣」の用語は、「人に関するもの」も見られるが、「自然に関するもの」が多く用いられている。「天地之氣」「天氣」「地氣」「天之六氣」「陰陽之氣」等である。尚、「陰陽之氣」という考えによつて、ここで初めて陰陽と氣がドッキングをし、陰は影、陽は日向とする単純な陰陽から、陰陽は氣のエネルギーの現れであるというふうに考えられ、陰陽論の展開へつながつていつたのである。

また、『老子』と同じように万物生成論が語られている。

人間の始源を考えてみると、もともと生命など存在していなかつた。生命がなかつただけでなく、もともと形など存在していなかつた。形がないばかりでなく、もともと氣もなかつた。何もない空間からひとりでに変化して氣が生じ、氣が変化して形が生じ、形が変化して生命（物質）が生まれたのだ。（至樂篇）  
これは、無→氣→形→生の段階が示されている。

そして、人の生死と氣の関係についても述べられている。

人の生は氣の聚まりなり。聚まれば則ち生となり、散すれば則ち死となる。若し死と生と徒たらば、吾また何をか患えんや。故に万物は<sup>ひとと</sup><sub>なかま</sub>一也（北遊篇）

(人というのは氣の集まりである。氣が集まれば生き、氣が散れば死ぬ。……人の生死を氣の離合聚散として受け取つてゐる)

といふことを示してゐる。

## ⑤『列子』

次に『列子』を見てみよう。

清輕なるものは上りて天と為り、濁重なるものは下りて地と為す。沖和の氣は人と為す

つまりこれは、「軽いものは上に上がつて天を造り、重いものは下に下つて地を造る」という天地創造を氣によつて説明している。この「軽い氣」「重い氣」という考えは、天地という大自然だけではなく人体にも適用され、そのバランスが取れていれば健康とされ、どちらかに偏つているときは病気とされていた。この健康と病気は氣のバランスによるという考え方は、後の中国医学に大きな影響を与えることになった。

また、宇宙の生成を示した文章として

大易は未だ氣を見ず也、大初は氣の始め也、太始は形の始め也、大素は質の始め也。氣、形、質ともなつて未だ相離れず。

氣、形、質と分けてゐるが、これも「氣」の変化した形といえる。

## ⑥『呂氏春秋』

次に『呂氏春秋』の氣を見てみる。『莊子』と同じように、万物は氣から生成する、という立場に立つてゐる。

精氣の集まるや、必ず入るあり。羽鳥に集れば、与りて飛揚を為し、走獸に集れば与りて流行を為し、珠玉に集れば与りて精朗を為し、樹木に集れば与りて茂長を為し、聖人に集れば与りておおいなる明を為す。精氣来るや、軽きに因りて之を掲げ、走るによりて之を行かしめ、美によりて之を朗らかにし、善に因りて之を長じ、智によ

りて之を明らかにす。（季春紀尺数篇）

これは、精氣は自然界から個々の存在の中に入つて、それぞれの特徴に応じ、そのものの活動の源泉となるエネルギーを意味しており、しかも、単に動物や植物に限らず鉱物にも適用しているところに特徴がある。

精氣一つは上り、一つは下り、圓周し、また混ざり、繫留するところ無し（季春紀圓動篇）

つまりここでは、精氣は天地の間に活動して上つたり下つたり、巡り回つて止むことがないと述べている。一方、一年の季節の移り変わりを気によつて表現し、その移り変わりと人の生活は結合しており、その季節にあつた政治を行わなければならぬことが規定（時令）されていて、それに適合するときには国は榮え、反するときには災害を伴うようになるとも述べられている。

このように、『呂氏春秋』では、人における氣は主として精氣としてとらえられ、精氣を通じて人間相互の神秘的な感應が可能だとし、また、自然界との氣の交流は時令を通して行われる事を述べ、自然界と人間界の氣を通してのエネルギーの交換、交流が行われてることを示している。この自然と人間との氣を通しての感應という考え方は、後に天人相関説につながつていくのである。

## ⑦『淮南子』

最後に『淮南子』の「氣」を見てみよう。自然に関する氣としては、道家の影響を受けて宇宙生成原理としての氣を述べている。

道は虚カクに始まる。虚カクは宇宙を生じ、宇宙は氣を生じ、氣は涯垠<sup>がいん</sup>にあり。清陽なるは薄靡<sup>はくび</sup>にして天と為り、重濁なるは凝滯<sup>ぎょうたい</sup>して地と為る。……天地の精をかさねて陰陽と為り、陰陽の精を専らにして四時となり、四時の精を散じて万物となる。積陽の熱氣は火を生じ、火氣の精なるは日という。積陰の寒氣は水となり、水氣の精なるは月となる。（天文訓）

(天地が未だ形を成していない、全てが渾然としている。それがやがて広がりを持ち、宇宙を生じ、宇宙が気を生じた。気には質の違いがあり、澄み切った軽い気は上昇して天となり、重く濁った気は下降して地となつた。天地の精気は重なり合つて陰陽となり、陰陽はどちらかに偏つて四時（春夏秋冬）となり、四時の精気が分散すると万物になる。一方、陽気が集まつた熱気は、火を生じ、火の精気は日となる。陰気が集まつた寒気は、水になり、水の精気は月となる。日月の気の精微なものは星となつた。こうして世界は造られていった。)このように、道と氣と精とが陰陽と相互に変化し、つながつてることを示しており、中国流の宇宙生成論の何たるかを知ることができる。

また、次の文章では、「氣」が陰陽に転化して、しかも自然界の変化に応じていていることが述べられている。  
氣を吐く者は施し、氣を含む者は化し。是故に陽は施し、陰は化す。天の偏氣、怒るものは風と為し、地の含氣、和する者は雨と為す。陰陽相薄り、感じて雷となり、激して霆となり、乱れて霧となる。陽氣勝てば則ち散じ、雨露となり、陰氣勝てば則ち霜雪となる（天文訓）

この「天が氣を吐き、地がその氣を含んで万物・万象が生起する」というイメージは、中国伝統の宇宙生成論の基本的図式であり、また、ここで既に陰陽の勝ち負けが論じられていることは、既に陰陽論が確立されていたと考えられる。

### 三、「氣」の概念のまとめ

以上、「氣」の概念の発想と展開を『説文解字』から始まって『論語』『孟子』『老子』『莊子』『列子』『呂氏春秋』『淮南子』と見てきた。そこで、古代の文献における「氣」の概念の定義付けをしてみたいと思う。この定義付けは極めて難しいと思われるが、敢えて言うなら、

- 現象世界における一切の存在ないし機能の根源（存在物を構成する究極極微のアトム的なもの）

## ○生命の根源

○人間の精神機能をつかさどる心の働き  
ということができるのではないだろうか。

つまり、もの・いのち・こころの世界はすべてが気の所作であり、様々な形態や機能をともなって現れる気は、全てが連続しているものであり、物も身体も精神も氣から見れば別のものでなく一つのものである。ここが西洋流の物心二元論的思考とは根本的に異なる考え方である。そして、気の次元で物事を見るとき、物心の別、身心の隔たりは消え、全てはもともと一つであるという氣一元論的世界觀が生まれてくるのである。前にも述べたように、身体は気に満されており、それが不足したりバランスを崩したりすると病気になると考えられていた。そして、その気は、天地に満ちている気と同じ物であり、宇宙に充満している気が、凝集と拡散を繰り返し、常に流動していることによつて、全ての物・全ての事の生成・変化・消滅という現象を起こすのである。この「凝集・拡散・流動」という気のエネルギーが、それだけでは無味乾燥な陰陽・五行をやがて思想にまで引上げ、人々の生活に活用されていったのである。

## 参考文献

- 『陰陽五行説 その発生と展開』 根本幸夫 根井養智（薬業時報社）
- 『中国上代思想の研究』 栗田直躬（岩波書店）
- 『氣 論語からニューサイエンスまで』 丸山敏秋（東京美術）
- 『氣のマンダラ』 山部嘉彦（柏樹社）

※本稿は平成六年十月二十八日、宗務院において開催された第四十七回日蓮宗教学研究発表大会において発表したものに加筆したものである。